國學院大學学術情報リポジトリ

「英語文学」作品を読む

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山西, 治男, Yamanishi, Haruo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000483

「英語文学」作品を読む

山西治男

【はじめに】

平成29年度に文部科学省が示した教職関連の「英語科に関する専門的事項」によると、学生が学ぶべき項目は1.「英語コミュニケーション」2.「英語学」3.「英語文学」4.「異文化理解」と四つに分かれている[(1)]。

三つ目の項目の「英語文学」は、従来、英文学やアメリカ文学あるいは英米文学という名称が多く使われてきており、あまり馴染みのある言い方ではないが、この項目の【全体目標】として、

> 英語で書かれた文学を学ぶ中で、英語による表現力への理解を深めるとともに、英語が使われている国、地域の文化について理解し、中学校及び高等学校における外国語科の授業に生かすことができる。

とある。「英文学」や「アメリカ文学」あるいは「英米文学」と呼ばれてきたものが、「英語で書かれた文学」作品という意味で、英米だけを特定とするのではなく、「英語が使われている国」であるカナダやニュージランド、南アフリカあるいはインドなどの英語圏で生まれた文学作品も広く指すものと思われる。岡村仁一氏は、こうした「コア・カリキュラム」に関する記述から、

> イギリス・アメリカにとらわれず、「英語が使われている国・地域」において、「英語で書かれた」文学という意味で「英語文学」という名称が用いられているように思われる[(2)]。

と述べている。文部科学省の意図は、英米の文学作品だけに囚われずに、広く「英語で書かれた」文学作品を扱ってほしい、あるいは扱っても構わないということであろう。

さらに「英語科に関する専門的事項」を見ていくと、

【学習内容】
◇学習項目
①文学作品における英語表現
②文学作品から見る多様な文化
③英語で書かれた代表的な文学

◇到達目標
1）文学作品において使用されている様々な英語表現について理解している。
2）文学作品で描かれている、英語が使われている国・地域の文化について理解している。
3）英語で書かれた代表的な文学について理解している。

とあることから、文学的な英語表現と英語圏の多様な文化を学ぶことができ、「中学校及び高等学校における外国語科の授業に生かすことができる」、英語で書かれた「代表的な」文学作品を、教材として扱う授業が想定されている。「代表的な」という一語は、単に「有名な」ということを意味するのではなく、上記の文学的な英語表現と英語圏の多様な文化を学修できる作品を指すのであろう。従来の英米中心ではなく、少し視野を広げた感があるが、以上の文部科学省の説明は残念ながら抽象的である。「どのような作品をいかに扱うか」という具体的な点については、各大学あるいは各担当教員に任されていると言っていい。

そこで、大学の授業という場で、具体的にどのようなことを教示し、受講者になにを学修させていくことが肝要であるかを、これから試論として述べていきたい。先の「到達目標」に準ずれば、多様な英語表現とは、英語の文法、構文を踏まえての、文学的な表現、つまり比喩や暗示やパロディなどの英語のレトリックに関する事項であり[(3)]、多様な文化とは英米あるいは英語圏の、キリスト教に関連する文化や各地域に根付いた土着的な文化などのさまざまな文化的事項を指すだろう。そして、そうした事項をただ知っているのではなく、いわば知識を知恵にまで高めて、中学や高校の場で教える際に役立たせ、「授業に生かすことができる」力にまで向上させることが理想であろう。

当然のことだが、以上のことを、学生の英語の力あるいは英語教師の力量として培うためには、

1）英文法をしっかりと学ぶこと
2）日本文化との比較をしながら、英米文化・英語圏の文化を学ぶこと

の二点が必要だと思われる。１）は、単に英文法の用語を知っていることではなく、中高生に教えられるレベルまで、英語のきまりやルール、特徴を理解した「使える英語力」になっていることを意味する。日本語の文法との相違も踏まえていることも、中学生や高校生に教える時には必要になってくるだろう。英文法を始めとする英語学関連の授業でこうした力は身に付く。２）は、英語圏の高尚な文化も大切であるが、英語が使われている国や地域の子どもでも知っているようなこと、いわば英米のCultural Literacy つまり「文化的背景知識」を持っていることが肝要となる[(4)]。英米文化論や地域論などで養われる力である。こうした２つの「知」あるいは英語の力を試す実践の場が、英語文学作品の読解であろう。いま一度「到達目標」に即して言えば、英文法をしっかりと学修した上で、１）「文学作品において使用されている様々な英語表現について理解し」、英米の文化的背景知識を学修し、２）「文学作品で描かれている、英語が使われている国・地域の文化について理解し」、それにより、３）「英語で書かれた代表的な文学について理解」できるということである。

「英語文学」作品を読む

では、以上のような中学や高校で「授業に生かすことができる」の力を、学生に付けさせるために、どのように英語文学作品を読んだらよいのか？　本論文では、アメリカのＳＦ作家であるフレデリック.ブラウン（Frederic Brown 1906-72）の短編“The Solipsist”（「唯我論者」　以下、この題名とする）を取り上げる。作品に即しながら、「読解のポイント」として、英語文学作品の英語表現と文化を考察していく。この作品は、ショート・ショートとも言えるほどたいへん短いので、原文のテキスト全体を提示する。

“The Solipsist”

Walter B. Jehovah, for whose name I make no apology since it really *was* his name, had been a solipsist all his life. A solipsist, in case you don't happen to know the word, is one who believes that he himself is the only thing that really exists, that other people and the universe in general exist only in his imagination, and that if he quit imagining them they would cease to exist.

One day Walter B. Jehovah became a practicing solipsist. Within a week his wife had run away with another man, he'd lost his job as a shipping clerk and he had broken his leg chasing a black cat to keep it from crossing his path.

He decided, in his bed at the hospital, to end it all.

Looking out the window, staring up at the stars, he wished them out of existence, and they weren't there any more. Then he wished all other people out of existence and the hospital became strangely quiet even for a hospital. Next, the world, and he found himself suspended in a void. He got rid of his body quite as easily and then took the final step of willing *himself* out of existence.

Nothing happened.

Strange, he thought, can there be a limit to solipsism?

'Yes,' a voice said.

'Who are you?' Walter B. Jehovah asked.

'I am the one who created the universe which you have just willed out of existence. And now that you have taken my place—' There was a deep sigh. '—I can finally cease my own existence, find oblivion, and let you take over.'

'But—how can *I* cease to exist? That's what I'm trying to do, you know.'

'Yes, I know,' said the voice. 'You must do it the same way *I* did. Create a universe. Wait until somebody in it really believes what you believed and wills it out of existence. Then you can retire and let him take over. Good-bye now.'

And the voice was gone.

Walter B. Jehovah was alone in the void and there was only one thing he could do. He created the heaven and the earth.

It took him seven days.

【読解のポイント①】物語の構造、plotline

まず、英語の文学作品に限らず、文学を読む際の基本的なことを確認したい。それは、plotlineである。plotlineについては、本来は国語の時間で取り上げるべき事項だと思うが、小学校から高校までにあまり学習してこなかったのか、英語の文学作品を読む際に、学生はあまり意識していないように思われる。たいていの文学作品の場合、物語の流れは、

冒頭→発端→山場・展開部分→クライマックス・転換点→結末、終わり

となる。言語技術教育の研究者の三森氏は、plotlineという言葉ではなく、「テ

キストの構造」あるいは「物語の構造」と称し、次のように説明している。

> 物語には、典型的な構造がある・・・メルヒェン、昔話、物語、短編小説、長編小説などの多くが、この典型的な構造に基づいて成り立っています。とりわけメルヒェンや昔話は、たいていこの「テキストの構造」にぴったりと当てはまる単純な構造をしています。昔話などの短い物語は一般的に、一つの事件、あるいは葛藤を巡って筋が展開します。物語の冒頭部分で主人公の紹介とその置かれた時代背景や環境についての説明がなされると、何らかの事件、あるいは葛藤を巡って物語が動き出し、事の進展と共に山場を登って物語が盛り上がり、クライマックスと共に事情が急転換して事件が解決して、あるいはもつれた葛藤の糸がほぐれて、「めでたし、めでたし」で終わるのが、典型的なメルヒェンや昔話のパターンです(5)。

三森氏によれば、欧米ではこうした物語の構造分析を「読書技術教育」の一環として行なっているということである。英語作品を読解する際にも、こうした構造分析をすることが大切であり、実際の授業では、学生に折れ線グラフのようなplotlineを描かせている。「唯我論者」について構造を分析すれば、第一段落で「主人公が紹介」され【冒頭】部分となっている。第二段落で、「一つの事件」が起き【発端】となり、以後物語が【展開】してゆき、作品の半ばあたりのNothing happened.から「物語が盛り上がり」、“Yes,”という一つの声＝a voiceが聞こえたとこらから「急転換」し、これが【転換点】となり、【結末・終わり】に向かってゆく。こうした大きな構造、流れを掴むことが、文学作品の読解には大切である。これはなにも英語文学作品にだけ当てはまることではなく、一つの英語文化であり、英米の映画を鑑賞するときや新聞などのジャーナリスティックな内容の英文を読むときにも、役に立つはずである。

【読解のポイント②】物語の視点（point of view）・・・語り手、語り方そして登場実物について

物語の構造を支えるものとして、物語の視点がある。誰が、どのような視点から語っているのかを確認することが大切である。「唯我論者」では、冒頭に...I make no apology...と出てくる。作者と思しき人物が、Walter B. Jehovahについて語る「一人称」物語である。一人称の語り手でも、すべてを知っているかのように語る全知全能方の語り手もいれば、「自分の体験、知識」に限定して語る視野が狭い語り手もいる。だれがどのように語るのかに注意したい。「唯我論者」では、作者と思しき語り手Iが、全知全能の神のように登場人物の気持ちや心の中までも語ってゆく。

本文の二行目に...in case you don't happen...と続くが、このyouは読者を指すyouである。I=わたし、You=あなたと機械的に覚えている学生が散見するが、英語では、

I ----------	You
Speaker	Listener
Writer	Reader
Sender	Receiver
話し手	聞き手
書き手	読み手
メッセージの	メッセージの
送信者	受信者

のように、Iはいわば単に情報などの発信者であり、Youはその受信者である。状況や立場によって、「わたし」になったり「オレ」になったり、「あなた」や「お前」や「君」になったりする日本語・日本文化と違い、英語では、話し手・書き手はいつもI（「自分」）であり、その情報を受ける「相手」はいつもYouである。英語では、年齢や性別あるいは立場によって、このI---Youの関係が崩れることはない。

語りの視点や語り手を押さえることと同義となることもあるが、登場人物（characters）についての考察も文学作品の読解には必要である。「唯我論者」で登場するのは、語り手のI、そしてW.B.エホバ、一つの声（voice）の主である。

【読解のポイント③】英語の句読法について

書き出しは、Walter B. Jehovah, for whose name I make no apology since it really *was* his name, had been a solipsist all his life. であるが、Jehovahという単語から何を連想するか？　Jehovahは旧約聖書の神の名に由来するのが、この短編自体が聖書の「創世記」を踏まえている点をここでは指摘し、英米の作品を読むときにはキリスト教の知識も必要だという点を述べるにとどめる。

つづく...it really *was* his name...の箇所は、なぜwasがイタリック体になっているのか注意したい。どのような時に英語の書き言葉では、「イタリック体・斜字体」を使うのか？　『英語百科』には以下の説明がある。

①　外国語の場合　What is the English for *kamakiri*?

②　書物・雑誌・新聞・小説・映画名などに　*The Old Man and the Sea*

③　強調したい語に　I'm telling *you*.[6]

本文の*was* his nameは③の強調したいときに当てはまり、読む場合にはwas

を強く読むことなる。「Jehovahが本名だったんだから仕方がない」というニュアンスを読み取らなければならない。こうした表記が文学的表現の一つと言えるだろう。同じ用法は、つぎのLooking outで始まる段落の最後にもthe final step of willing *himself* out of existenceという形で、また物語の終盤で、Jehovahの発話として、'But—how can *I* cease to exist? That's what I'm trying to do, you know.'と出てくる。英語のイタリック体の使い方を理解していれば、「他でもない彼自身が」「お前ではなく、この俺はどうやって存在を消したらいいんだよ？」という意味合いだと理解できる。

イタリック体に限らず、会話を示すときには、アメリカ式は“　”のダブル・コーテーションマークを使い、英国式は‘　’のシングルのコーテーションマークを使うなどの英語の「句読法」あるいは「書き言葉の符号」について、文学作品を読みながらでも再確認、あるいは学修することができる（ちなみに、引用したテキストはペンギン版なので、英国式である）。イタリック体だけでなく、ピリオドやコンマ、コロンやセミコロンあるいはダッシュやアポストロフィーなどの使い方は、将来中学や高校で教える立場になる学生には、学ぶべき必修事項である。さらに言えば、英語の句読法を受動的に知っているではなく、実際に英語を書く際に句読法を適用して使えるほどの能動的な力になっているのが理想であろう。

句読法について、さらに指摘すれば、日本語では三つのものを列挙する場合、「ＡとＢとＣ」のように「と」を使って表現できるが、英語では、andは最後のものを挙げる前に使うのがルールである。したがって、A, B and CあるいはA, B, and Cとなる。A and B and Cとは通例表記しない。４つのことを列挙する場合なら、A, B, C, and Dとなる。X個を列挙する場合なら、A, B, C, D,..and Xとなり、andは最後のものがくる前のいわば印、マーカーになっている。これは単語だけでなく、長い文章となっても同じであり、本文の二番目の文章も、

> A solipsist, in case you don't happen to know the word, is (A)one who believes that he himself is the only thing that really exists, (B)that other people and the universe in general exist only in his imagination, (C)and that if he quit imagining them they would cease to exist.

という構造になっている。同じことは、第二段落にも適用できる。

> One day Walter B Jehovah became a practicing solipsist. (A)Within a week his wife had run away with another man, (B)he'd lost his job as a shipping clerk (C)and he had broken his leg chasing a black cat to keep it from crossing his path.

A, B and Cの形である。コンマの使い方とandの用法を合わせて押さえておきたい。

また、物語の後半には、ダッシュが使われている。

> ‘—I can finally cease my own existence, find oblivion, and let you take over.’
> ‘But—how can *I* cease to exist? That’s what I’m trying to do, you know.’

このダッシュについて、先に引用した『英語百科』には、以下の説明がある。

> （1）補足や説明を挿入するとき
> Once a week——on Monday——he taught us.
> （2）思考の中断やことばの途切れを表わすとき
> “Well, I’ll tell it to you.—Oh! Something is burning.”

「唯我論者」では、（2）の「思考の中断」を表しており、一つの文学的な表現になっている。

【読解のポイント④】日本語にはない感覚・・・英語の時制

つぎに英語の時制について取り上げたい。第一段落に...had been a solipsist all his life.と過去完了形が使われている。第二段落は、前記の□で囲った通り、過去形becameと過去完了形had run awayが使われている。特に、第二段落の過去形と過去完了形について考察したい。参考までに、この段落の既存の翻訳を挙げる。

> ある日、ある時を境い（原文ママ）にして、ウォルター・B・エホバは、自己の信条を実行に移すことにした。一週間たらずのうちに、彼の妻は男を作って家出し、彼自身は運送店員としての職を失い、あまつさえ、足もとにじゃれついた黒猫を追っ払おうとして、片足を折ってしまった[(7)]。

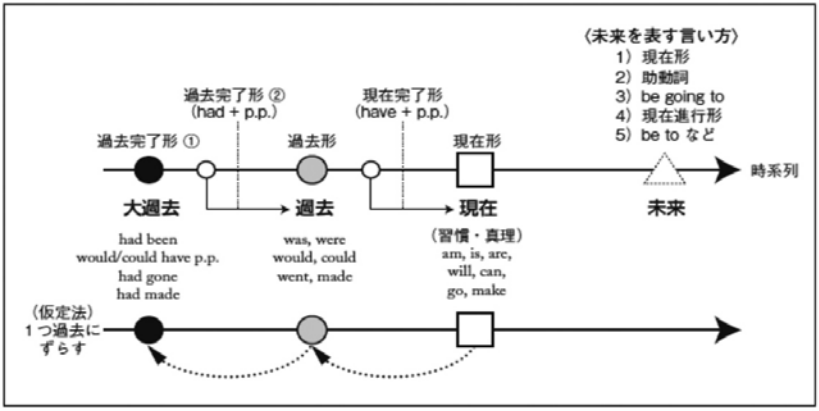
この翻訳文を見ると、日本語には英語にあるような時制がないせいか、英語を正確に読み取っていないように思われる。翻訳文を素直に読むと、まず「ある日・・・エホバが自己の信条を実行に移すことにし」、その後「一週間たらずのうちに」、三つのこと、すなわちA「妻の駆け落ち」、B「運送店員としての失職」そしてC「片足の骨折」が起こっている。しかしながら、英語ではそう表現されていな

い。英語では、過去完了形は過去形の時点よりも「前の時」を表わすことができる。つまり、英語の時制を踏まえれば、事態はＡＢＣの三つのことがあったので、その不愉快な三つの出来事が一週間足らずのうちに起った後に、「ある日・・・自己の信条を実行に移すことに」するのである。

翻訳の間違いを指摘することが本論文の目的ではないが、なぜ翻訳が間違ってしまったのかを考えてみると、日本語には英語と同じような時制が存在しないためではないかと思われる。過去形も過去完了形も日本語では、「～た、～だった」と表記するしかないこともあるためか、翻訳者は英語の時制にさほど頓着せず、英文の並び通りに訳してしまったのではないかと思われる。学生の中にも、英語の時制を気に留めない者も多い。文学作品の作者の意図を考察することも、作品の解釈や批評をすることも大切なことだが、その前に物語を正確に英文の通りに読み解くことが必要だと思われる。

以上のようなこともあり、ここで英語の時制を一度整理しておきたい。物語の構造、plotlineを読み解くためには「時系列」の整理が欠かせないからである。英語の時制を再確認しておきたい。学生の多くは、過去形や現在完了形あるいは過去完了形をバラバラに頭に入れていて、英語の時制全体を有機的に整理できていないようである。いわば「使える知識」として身に付けていないように思われる。「現在完了形はhave＋過去分詞、用法は完了と経験と・・・」といった具合に、形だけを公式のように覚えている傾向がある。どのようなときに、どのように使うかまで、学修しておきたい。

以下は、筆者が愚考した、英語の時制を整理した図である[8]。



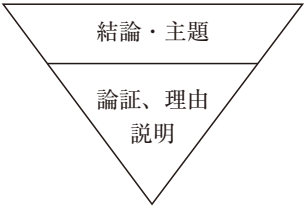
以上のような英語の「時制心」を身に付けておけば、誤読する可能性も低くなるであろう。先の英文を英語の時制に基づき、同時に日本語・日本文化への置き

換えを踏まえて、やや説明的に訳せば、以下のようになる。

> ある日、ウォルター・B・エホバは、自己の唯我論を実践に移すことにした。というのも、その前の一週間足らずにうちに、奥さんが他の男と駆け落ちし、自分の配送係の仕事を失い、さらには、目の前を横切ったら不吉だという黒猫を横切らせまいと追いかけているうちに片足を骨折してしまったからである。

【読解のポイント⑤】英語の論じ方

翻訳が間違ってしまった理由が、一つ別にあると思われる。それは、日本語・日本文化とは英語の論じ方、話の進め方が違っている点である。英語では、段落の冒頭に「結論、主題、言いたいこと」を述べ、それについて論証や説明をしていく、ほとんど常に逆三角形方（▼）の論理構成を取る。



「唯我論」でも同じように、段落の冒頭で、「これまでは頭の中だけのことだったが、ある日、実践的な唯我論者になった」という結論・主題を述べ、それに続いて、その理由を「論証・説明」していく逆三角形方になっている。

> （結論）<u>One day Walter B Jehovah became a practicing solipsist</u>.（ここから論証、説明）⇒Within a week his wife had run away with another man, he'd lost his job as a shipping clerk and he had broken his leg chasing a black cat to keep it from crossing his path.

英語を読むときは、このような頭の働かせ方をしないといけないのであるが、おそらく翻訳者は英語の時制とともにこのような英語のクセを理解していなかったために、誤読してしまったと思われる。One day …became a practicing solipsist.と読んだところで、「つぎはその詳しい理由が説明されるな」と思って、Within a week his wife had run away…と読み進めていくのが常道である。became a practicing solipsist.　とWithin…の間、前の文章のピリオドと次の文の冒頭の語の間で、「なぜなら、というのも」とbecameよりも過去に遡ること

を心の中で準備するのである。日本語・日本文化にはない事項だけに、こうした点も踏まえておきたい[9]。

【読解のポイント⑥】英米・英語圏の文化

翻訳と拙訳との違いは、時制に関することだけではない。「黒猫」についても違っている。翻訳では、「足もとにじゃれついた黒猫を追っ払おうとして、片足を折ってしまった」となっている。拙訳は、「目の前を横切ったら不吉だという黒猫を横切らせまいと追いかけているうちに片足を骨折してしまった」である。

「黒猫」については、英語圏で迷信がある。

> 古代エジプトでは猫を殺す者は厳罰に処されたし、中世では黒猫は魔女、サタンが姿を変えたものと考えられていた。歩いている道を横切る黒猫は魔女の変身と考えられた。[10]

こうした迷信を踏まえていなければ、この箇所の英文を十分には読み解くことはできず、辻褄を合わせるように「足もとにじゃれついた黒猫を追っ払おうとして」のようにこじつけてしまう。これは自戒を込めてだが、英米の五歳児でも知っているようなことを知らないがために、大きな誤解をしてしまうという時がある。また、先にA, B, and Cについて触れたが、この作品は第一段落の「唯我論者」の説明からそうだが、「３」という数字が意図的に使われている。「唯我論を実践する」前に起きた不幸な出来事も３つあった。日本文化にも同じような言い方があるが、英米の文化にもThird time is lucky.（三度目の正直）という言い方があり、またキリスト教文化の「三位一体」など、３という数字はいずれも興味深いものがある。その意味でも、引用した文献のような資料から、英米文化、英語圏の文化風習、神話や迷信、ことわざなど英米文化の基礎的な事項を学んでおくことが肝要とある。

【さいごに】

英語文学の作品の短編を取り上げ、以上いくつか英語的表現と文化について、考察してきた。英語表現と英米文化に関する２つの「知」あるいは英語の力を試す実践の場が、「英語文学」作品の読解であろう。実践の場では、時に応じて、細かい文法的事項の確認も必要である。例えば、a やtheといった冠詞の使い方も文学作品から、物語の流れの中で学修できる。

> Looking out the window, staring up at the stars, he wished them out

of existence, and they weren't there any more. Then he wished all other people out of existence and ㋐ the hospital became strangely quiet even for ㋑ a hospital. Next, the world, and he found himself suspended in a void. He got rid of his body quite as easily and then took the final step of willing *himself* out of existence.

Nothing happened.

Strange, he thought, can there be a limit to solipsism?

'Yes,' ㋒ a voice said.

（中略）

'But—how can *I* cease to exist? That's what I'm trying to do, you know."

'Yes, I know,' said ㋓ the voice. 'You must do it the same way I did. Create a universe. Wait until somebody in it really believes what you believed and wills it out of existence. Then you can retire and let him take over. Good-bye now.'

㋐は、エホバが片足を骨折して入院している特定の病院だから、the hospitalとなっている。では、なぜ㋑はa hospitalなのか？特定の病院ではなく、不特定の「一つの病院として」と意味で使われているからである。普通、病院は静寂な環境が求められており、そもそも静かなのであるが、エホバによってエホバ以外のすべての存在が消されてしまったので、「一つの病院としても異常なくらい静まり返った」ということである。繰り返しになるが、と「theは、それ、a/anは一つの」というような知識ではなく、教師として教壇に立ったときに生徒に教えられるほどの生きた文法の知識となっていることが必要なのである。つづく、㋒は「唯我論に限界はあるのか」と思ったエホバに、「一つの声」が語り掛けてきたので、a voiceとなり、㋓はその語り掛けてきた特定の声ゆえに、the voiceとなっている。冠詞のaやtheを気にしていたら、英語の勉強は進まないとも言われるが、将来教師となって、自分の英語力を「中学校及び高等学校における外国語科の授業に生かす」のであるから、細かい英語の文法事項もしっかりとマスターしておくべきであり、英語の文学作品でもそれは十分可能である。

以上の冠詞の用法だけでなく、先に触れた時制についても、物語の終盤で、

And now that you have taken my place.... '— I can finally cease my own existence, find oblivion, and let you take over.'

'But — how can *I* cease to exist? That's what I'm trying to do, you know."

'Yes, I know,' said the voice. 'You must do it the same way I did…

Then you can retire and let him take over.'

と、現在完了形や助動詞のcanやmust、現在進行形などについても、再確認・学修できる。このように英語の文法をしっかりと踏まえて、物語、文学作品を読むことで、英語の力も付いてくるはずである。

以上、教える側として、「英語文学」の一つの短編作品から、「このようなことを読み取ってほしい、学んでもらいたい」と思う点をできるだけ具体的に考察してきた。「英語文学」のみならず英語を読み解く作業は、木を見て森を見ず、ではなく、まず森を見て、そして細かく木を見て、また時に応じて森を見て、また木も見る、の繰り返しである。こうして、最初は意識的に学んだことが、いつの間にか、無意識にできるようになる。「英語文学」を読む際に、文法や知識を意識しないで、読解できるようになることが理想である。スポーツや音楽でも同じで、始めは「このように腕を動かす」とか「ドはこの指で」といった具合に、意識的に練習をしていたものが、いつの間にか腕や指が自然と正しく動くようになる。英語を読むときにも、まずは意識的に英文法や句読法や英米文化の背景的知識を意識的に学び、それがいつの間にか意識ぜずに、読み解いていけるようになることが理想である。

最後に、参考までに「唯我論者」の拙訳を記す。

「唯我論者」

ウォルター・B・エホバは、この名前についてあれこれ弁解がましいことは申し上げないが、それというのもそれが本名に他ならなかったからで、この男は生まれてから死ぬまでずっと唯我論者だった。唯我論者という言葉を、読者の中にはご存知ない方もいるかもしれないので、念のために説明しておけば、唯我論者とは、本当に存在するのは自分のみと信じ、自分以外の他人や世界全般は己の想像の中だけに存在するものと考え、それゆえ自分が想像をやめてしまえば、他人も世界も存在を停止すると信じ込んでいる御仁である。

ある日、ウォルター・B・エホバは、自己の唯我論を実践に移すことにした。というのも、その前の一週間足らずにうちに、奥さんが他の男と駆け落ちし、自分の配送係の仕事を失い、さらには、目の前を横切ったら不吉という黒猫を横切らせまいと追いかけているうちに片足を骨折してしまったからである。

入院した病院のベッドの中で彼は、すべて終わらせる決心をした。

窓から外を見上げ、夜空の星々を睨み付け、消えろと念じた。すると星は夜空から消え失せた。それから、自分以外の他の人はひとり残らず消えろと念じると、

その病院が、病院とはいえ、異様なくらい静まり返った。次は、世界が消えろと念じると、虚空の中で宙ぶらりんになってしまった。彼はいとも容易く自分の肉体を消すと、自分自身の存在を消すという最終段階に達した。

なにも起こらなかった。

変だな。唯我論には、限界があるのか？　と思った。

「そうだ」と、一つの声がした。

「だれだ？」ウォルター・B・エホバは訊いた。

「わたしはお前がちょうどいま、念じて消し去った宇宙を創造したものだ。これでやっとお前に立場を譲れるのだ･･･」そこで深い溜息が一つ。「･･･これでやっと、わたしは自分の存在をやめることができ、すべてを忘却し、お前に引き継ぐのさ」

「だが･･･この俺はどうやって存在を消すことができるんだ？　それをいまやっていたところだったんだぜ」

「ああ、わかっている」とその声が応えた。「お前はわたしがやったとおりにやらなければならない。まず一つの宇宙を創造する。じっと待つんだ。やがてその宇宙の中のだれか一人が、お前が信じたことを心底信じるようになって、その宇宙を消そうと思うようになるまで待つんだよ。そうしたら、お前は隠退してそいつに引き継がせることができる。では、さようなら」

こうして、その声は消えた。

ウォルター･B･エホバは、虚空の中で自分ひとりだけになり、できることはたった一つとなった。エホバは天と地を創造した。

それには七日かかった。

使用テキスト

Fredric Brown, “The Solipsist” in *American Short Stories of Today*, Ed. By Esmor Jones (Penguin Books, 1988) pp.18-9

注

（1）文部科学省初等中等教育局教職員課　『教職課程認定申請の手引き』（平成31年度開設用）pp.11-12

（2）岡村仁一他「教員養成学部の英語教育専修における『教科及び教科の指導法に関する科目』のあり方について」『新潟大学教育学部研究紀要　第10巻第1号』2017年３月　pp.265-269

（3）佐藤信夫『レトリック感覚』（講談社学術文庫、1992年）英語文学作品の読解だけでなく、広く文学作品を読むときや言語活動を行なうときにもレトリックを学んでおくことは必要である。英語の教職履修者は少なくとも本書は読んでおくべきである。

（4）英米の文化的背景知識については、本学の野呂健教授が詳細かつ具体的に論じている。野呂　健「文化的知識と外国語教育」（『國學院雑誌』第94巻第６号、平成５年６月）pp.1-14

（5）三森ゆりか『絵本で育てる情報分析力』（一声社、2002年）p.117

（6）大谷・堀内監修『社会人のための英語百科』（大修館書店、2002年）pp.160-62

（7）フレドリック・ブラウン『天使と宇宙船』所収「唯我論者」小西宏訳（東京創元社、1965年）pp.260-61
（8）山西治男『やさしい翻訳入門』（DTP出版、2011年）p.43
（9）同じように英語の時制を踏まえずに、物語の時系列があやふやになり、正しく翻訳されていない例として、W.フォークナーの「エミリーへの薔薇」（“A Rose for Emily” 1930年）がある。フォークナーの研究者で翻訳者でもあった須山静夫氏が詳細に論じている。『クレバスに心せよ!—アメリカ文学、翻訳と誤読』（吉夏社、2012年）pp.40-5
（10）坂本他『英米事情ハンドブック』（英潮社、1993年）p.84

参考文献

・三森ゆりか『外国語を身につけるための日本語レッスン』（白水社、2003年）
・齋藤兆史　『英語の味わい方』（NHKブックス、2001年）
・儀部直樹・加藤めぐみ編『都留文科大学英文学科の英語教育—その無限の学び』第一号（都留文科大学英文学科、2017年）